

淡路人形浄瑠璃芝居〈じょうるりしばい〉（三原町市）

今から四百年ほど前、西宮の神官が、ある日、舟で海に出ておられますと、海面に、一人の童子〈どうじ〉があらわれて、

「わたしは、水児〈みずご〉でございます。住む家がないので、ここの浜辺にお社〈やしろ〉を建てておまつり下さい。」と消えてしまいました。百太夫〈ひゃくだゆう〉は神のお告げとして、さっそく浜辺にお社〈やしろ〉を建て、戎〈えびす〉三郎殿とおまつりし、淡路の住人、道薫坊〈どうくんぼう〉という人が舞をまわって、毎年、正月三日にお祭りをしていました。

それからは、西宮の浜辺では、ずっと豊漁〈ほうりょう〉がつづいたので、みんなは、戎〈えびす〉さんのご利益〈りやく〉と喜んでいました。そうこうしているうちに、道薫坊〈どうくんぼう〉がなくなりました。その頃から魚がとれなくなり、海の荒れることが多くなって、みんながこまりました。そこで、百太夫〈ひゃくだゆう〉は、道薫坊〈どうくんぼう〉を形どった紙人形をつくってお祭りしましたところ、さしもの長くつづいた時化〈しけ〉もおさまり、お魚もたくさんとれるようになりました。

それを聞いた諸国の人々が、その人形のお祭りをさせてくれとたのんできましたので、百太夫〈ひゃくだゆう〉は諸所に出かけて、人形まつりをいたしますと、不思議に大漁になるのだそうです。

そこで、方々でたのまれて諸国をめぐる内に淡路の三原町市・三条の地にとどまり、大御堂〈おおみどう〉という所に住んでいましたが、やがて菊太夫〈きくだゆう〉という人の入婿〈いりむこ〉となり、二人してこの芸術をみがき、ひろめました。

そのあと、文亀〈ぶんき〉元年（四百年ほど前）、引田源之丞〈ひきだげんのじょう〉が京都御所〈ごしよ〉の御節会〈おせちえ〉に召〈め〉されまして、三社神楽〈さんじゃかぐら〉の式をつとめたのに始めて天下に知られるようになりました。

引田〈ひきだ〉氏は、わが国人形芝居の始祖として朝廷から従四位下淡路椽〈あわじじょう〉に任ぜられて、「日本第一冠諸芸衆能〈かんしよげいしゅうのう〉」と称せられ、御陽成天皇〈ごようぜいてんのう〉に召〈め〉されて、天覧〈てんらん〉をかたじけのうしました。

慶長〈けいちょう〉の頃（一六〇〇年）、浄瑠璃〈じょうるり〉に合せて人形を操〈あやつ〉ることを始め、貞享〈ていきょう〉三年（一六八六年）、近松門左工門〈ちかまつもんざえもん〉が竹本義太夫〈たけもとぎだゆう〉のために「出世景清〈しゅっせかげきよ〉」をつくって、竹本座で上演して、たいへん人気がありました。

このようにして、門左工門〈もんざえもん〉が新浄瑠璃をつくり出してから、人形芝居の全盛時代をむかえました。

最盛期の江戸中頃には、市村に四十八座を数え、この芝居にたずさわる人は、男女合せて一千人にもなって、日本全国各地に広く移動興行したといわれています。

その後、明治の末ごろまでは、相当盛んに興行されていましたが、世の中の移り変りにしたがってしだいにおとろえ、現在、淡路島内では、市村六之丞〈いちむらろくのじょう〉、津名町志筑に淡路源之丞〈あわじげんのじょう〉、南淡町福良の淡路人形座〈にんぎょうざ〉の三座しかのこってありません。

また、この淡路人形は、大阪の文楽〈ぶんらく〉の祖といわれ、文楽の写実的で、せんさいな感じはもたないが、きわめて粗野な舞台と古典、豊かな大きな人形をつかい、独特の味があります。

昭和三十三年四月には、ソビエトを訪問し、モスクワで大へん人気がありました。